

【目次】

- ・世界の目的は「理想郷」の創造である……………[2ページ目]
- ・64 劫目で理想郷が生まれる……………[3ページ目]
- ・私の思う創造神話……………[3ページ目]
- ・マルクス・ガブリエル、ヘーゲル、仏教、スピリチュアルの言葉を使って真理について考察…
……………[4ページ目]
- ・自灯明・法灯明についての解釈、仏教とキリスト教について ……[5ページ目]
- ・アストラル界、メンタル界、コーザル界についての解釈・理解と、輪廻転生についての解釈・
理解 ……[6ページ目]
- ・仮に理想郷の創造が実現されたとしても……………[8ページ目]
- ・志向的クオリアの階層性について……………[9ページ目]

【世界の目的は「理想郷」の創造である】

各思想の解釈

●プラトンのイデア論

①善のイデア ⇒ ②イデアを創造 ⇒ ③イデアから追放された魂 ⇒ ④宇宙誕生
⇒ ⑤徳を積む ⇒ ⑥イデアへ帰還

●キリスト教

①神 ⇒ ②エデンの園を創造 ⇒ ③失樂園 ⇒ ④宇宙誕生 ⇒ ⑤アガペー、隣人
愛 ⇒ ⑥最後の審判で天国へ(エデンの園へ帰還)

●仏教

①如来 ⇒ ②仏国土を建立、空劫、第四禪天(色究竟天、阿迦尼吒天) ⇒ ③成劫
⇒ ④宇宙誕生 ⇒ ⑤住劫、カルマを解消 ⇒ ⑥壞劫から空劫へ(第四禪天へ帰還)

世界の目的は「理想郷」の創造である。

神はまず最初に、理想郷を創造した。

だが、誕生したばかりの魂は煩悩にまみれており、その煩悩により理想郷から追放され
ることとなった。

そして宇宙が誕生した。

宇宙は、煩悩を解消するための場であり、「真の理想郷」を創造するためのプロセスの
場である。

煩悩を解消した魂は、理想郷に帰還する。

全ての魂が理想郷に帰還すると、宇宙は消滅し、全ての魂が神となった「真の理想郷」
が誕生する。

言い換えれば、世界の目的は、キリスト教の言うところの「最後の審判で全生命が天国
に行くこと」であり、仏教の言うところの「全生命が仏陀(阿羅漢)になること」であるのか
もしれない。

【64 劫目で理想郷が生まれる】

阿毘達磨俱舍論によると、64 劫目で三禪天まで無くなり、全ての存在が四禪天で暮らすことになるらしい。

つまり、全ての存在が悟りの境地に至るにはこれだけの長い時間がかかるのだといえる。

だが、この一連のプロセスが全て「理想郷の創造のための学習プロセス」だと考えると、世界に希望が持てる。
そのような気がする。

もしかしたらライプニッツの言う予定調和、の最終地点が 64 劫目で全ての存在が四禪天で暮らすということであり、
神が可能な限り最良かつ最も調和のとれた世界を創った結果(最善世界説)がこのような世界なのだろう。

そしてそれは、この世のあるがままの運命を受け入れ、それを愛するというニーチェの運命愛にも繋げることができる。

【私の思う創造神話】

原初の世界は、神一者のみが存在する世界であった。
個の無い世界であり、神＝世界であり、世界には神だけが存在していた。

神は「自己」と「他者」という概念が存在する「個」を欲した。

神は「個」を創造した。

やがて、「個」を創造したことで世界の意識は「分離」していった。
そこで1つ問題が発生した。
「分離」に終わりはなく、どこまでも煩惱に終わりが無いという問題である。
その世界は苦しみに満ちた世界であった。

神の目的は、「個性」という存在と「統合された意識」という状態が両立された世界の創造であった。

「個」が維持されつつ、すべての「個」は統合されているというハイブマインドな世界である。

今我々が住んでいる世界は、個が統合されていない世界である。

個の統合のための発展途上の世界と言って良い。

「個」が消失されることなく、すべての個が「統合」されている。

このハイブマインドな理想郷を目指すために、世界は自己展開を続けている。

【マルクス・ガブリエル、ヘーゲル、仏教、スピリチュアルの言葉を使って真理について考察】

空(くう)から、あらゆる意味の場が発生した。

あらゆる全ての意味の場の中心にある本質は、空という void である。

世界の目的は「あらゆる全ての意味の場」を止揚した「理想郷の意味の場」の創造である。

我々の魂は、原初において最大数分離した。

分離した魂は、あらゆる意味の場を創造し始めた。

意味の場とは、カルマであり徳である。

ネガティブなカルマを持つ魂は、死後地獄においてカルマが解消され、void になった状態で再び生まれ変わる。

ゆえに、生まれ変わった際の前世の記憶は基本的には無い。

だが、解消された前世のカルマの痕跡は、現世に影響する。

ポジティブな徳を持つ魂は、理想郷創造のために精神世界へ次元上昇する。

【自灯明・法灯明についての解釈、仏教とキリスト教について】

自灯明・法灯明

「自らを灯明とし、自らをより処として、他のものをより処とせず、法を灯明とし、法をより処とせよ」

と説かれている。

だが、その真理の法というのは、自己意識の中心にあり、それは万人に共通である。

その法灯明を外部にある存在として仮定すると、外部に存在する仮想の法灯明に依存する他のものをより処とする結果になりかねない。

法灯明＝自灯明であり、究極的には自灯明のみをより処とする境地が悟りの境地ではないだろうか。

この境地においては、自己＝他者＝世界そのもの、という境地であり、自灯明のみをより処とするということは、同時に法灯明をもより処とし、他者や世界そのものもその中に含まれることになる。

悟りの教えを他者に伝えるということは、自分が“もう一人の自分”に教え伝えるということであり、

一人の自分が悟ったとしても、もう一人の自分が悟っていなければ、世界としての自分は悟ったことにはならない。

ゆえに、自分が自分自身を悟らせる、この発想が大乗仏教の発想に繋がってくるのだろう。

そう考えると、大乗仏教も上座部仏教も、アプローチの違いだけで最終到達地点は同じであるといえる。

キリスト教においても、アガペー(無償の愛)という教えは、

神＝自己＝他者＝世界そのもの、という発想の下、

「自分のことを愛するように、“もう一人の自分”である他者も愛せよ」となり、

キリスト教も仏教も、アプローチや表現の違いだけで最終到達地点は同じということになる。

【アストラル界、メンタル界、コーザル界についての解釈・理解と、輪廻転生についての解釈・理解】

各世界の特性および理想的境地は、こういう世界であると解釈した。

アストラル界:光の世界

メンタル界:愛の世界

コーザル界:波動の世界(カルマを書き換える力)

神(如来):統合された原初の世界

アストラル界においては、天国の世界は「光の世界」であり、地獄の世界は「闇の世界」である。

メンタル界においては、天国の世界は「愛の世界」であり、地獄の世界は「煩悩の世界」である。

コーザル界においては、世界の「カルマ」を管理する世界であり、ここから先は高級な魂でないと立ち入れない世界である。

そして、統合された原初の世界が「神」であり「如来」の世界である。

まず、統合された世界が分離したことによって我々は生まれた。

メンタル界→アストラル界と次元が下がるにつれ、分離の度合いが高まり、分離の最終到達地点が物質世界である。

罪のカルマを多く持った魂は、死後アストラル界において、その罪のカルマが反映された闇の世界を見ることになり、メンタル界においては煩悩の世界を見ることになる。

そのような罪を持った魂は、コーザル界には立ち入ることができない。
なぜなら、コーザル界はカルマを管理する世界であり、煩悩を持った存在がコーザル界に立ち入ると、世界のカルマが暴走し、秩序が崩壊するからである。

それを防ぐために、罪のカルマを持った存在は、アストラル界、メンタル界において罪のカルマが浄化され、
「空(くう)」の状態になった上で、再び物質世界に生まれ変わっていく。

徳を積んだ魂は、アストラル界において、その徳が反映された光の世界を見て、メンタル界においては愛の世界を見る。

そして、コーザル界へ次元上昇する。

世界の目的は、全ての罪のカルマを浄化し、「光」と「愛」で満たされた「理想郷」を創造することである。

～追記～

仏教の唯識と禅定の段階との関係性について、

こちらのサイトによると

<https://shanti-phula.net/ja/social/blog/?p=256697>

<https://shanti-phula.net/ja/social/blog/?p=258152>

- ・物質世界:前五識、意識
- ・エーテル界、アストラル界、メンタル界:末那識
- ・コーザル界:阿頼耶識

という対応関係になっている。

また、禅定については、
初禅天～第四禅天:アストラル界～メンタル界(色界)
に相当し、

コーザル界から先は、無色界に属する。

【仮に理想郷の創造が実現されたとしても】

仮に理想郷の創造が実現されたとしても、我々はその理想的な状態にいずれは「慣れ」
てしまい、
理想郷が、自身の心によって理想郷として認識できなくなってしまう。

ゆえに、仮に理想郷が実現されたとしても、それは永遠不滅ではないのだろう。

全ての煩悩が減して、悟りの境地に達したとしても、
その悟りの境地は永遠不滅ではなく、
いずれその悟りの境地にも慣れが発生し、退転して悟りが崩れてしまう。

悟りには52段階あると言われている。

参考:<https://true-buddhism.com/teachings/enlightenment/>

52段階の内、40段階目までを「退転位」といい、41段階目以上を「不退転位」という。

つまり、全ての存在が不退転位の悟りの境地に達した世界が、真の意味での「理想郷」
であるといえる。

全ての存在が不退転位の悟りの境地に達した時、永遠不滅の「理想郷」が誕生するの
だろう。

【志向的クオリアの階層性について】

茂木健一郎氏は、志向的クオリアの階層性についてこのように述べられている。

> 仏教では、「悟り」の段階として、52段階あるとされている。仏教の開祖、釈迦は最高の52段階まで行った。龍樹は41段階まで行ったとされている。このような「悟り」の段階は、意識の科学の文脈の中では「志向的クオリア」の階層性としてとらえることができる。

#クオリアと人工意識

つまり、

唯識の末那識、阿頼耶識の階層や、

多くの神秘主義思想で語られている魂の階層性、アストラル界、メンタル界、コーザル界の階層も、「志向的クオリア」の階層性としてとらえることができると捉えられる。

メンタル界までが仏教で言うところの色界、コーザル界から先が無色界とすると、このように解釈することができる。

参考: <https://shanti-phula.net/ja/social/blog/?p=258978>

- ・物質世界(意識、前五識) → 感覚的クオリア～有になる
- ・アストラル界(末那識) → 感覚的クオリアの素～感覚的クオリアが生起する
- ・メンタル界(末那識) → 志向的クオリア～感覚的クオリアの素が生まれる
- ・コーザル界(阿頼耶識) → カルマ～志向的クオリア
- ・神(如来) → void

菩薩五十二位との関係性についての解釈は、私の知識では正確な解釈は難しいものの、

菩薩の41位以上の十地より上が不退転位であるとされ、色界においては、色界第14番目の天である無煩天から色究竟天までは浄居天と呼ばれ、寿命が尽きればそのまま仏と成るとされていることから、無煩天が不退転位の境界であると解釈できる。

つまり、

<https://shanti-phula.net/ja/social/blog/?p=258152>

このサイトに照らし合わせて見ると、
メンタル界～コーザル界にかけての、コーザル界に近いメンタル界あたりの階層から先が不退転位であると解釈することができる。

ということは、コーザル界に近いメンタル界の階層まで至った高級霊の魂は輪廻転生から解脱することができ、
コーザル界から先が解脱であると解釈できる。

輪廻転生について、輪廻転生＝退転と解釈すると、
煩悩が残った状態で亡くなった魂が輪廻転生すると考えられる。

煩悩が残った状態で亡くなった魂は、アストラル界とメンタル界において、煩悩に塗れたアストラル体とメンタル体が解体されていく。
解体されることで、魂にはカルマのみが残ることになる。
ゆえに、生まれ変わった後の前世の記憶は基本的には無い。

カルマだけが残った魂は、そのカルマの作用により輪廻転生をする。

煩悩が残らない状態で亡くなった魂は、アストラル体とメンタル体が解体されずにコーザル界まで上昇する。
コーザル界まで上昇することで、輪廻転生からの解脱が成される。

コーザル界に上昇した魂は、世界のカルマの管理者(＝神)となる。

このように、輪廻転生の仕組みについて解釈することができる。